

日本人大学院生の「コミュニケーション」観についての 個人別態度構造分析

Personal Attitude Construct Analysis on the Perceptions of “Communication” in Japan

岩崎舞子*・伊藤彰浩**

Maiko IWAZAKI, Akihiro ITO

要旨

本論文の目的は、日本人大学院生の「コミュニケーション」観が、どのような要因によって形成された可能性があるかを探求することである。「コミュニケーション」という言葉が日本にどのように伝わり、どんな意味を担ってきたのか、先行研究を踏まえて確認した。その結果、1980年代後半から2000年頃にかけて、日本社会においてスキルとしての「コミュニケーション」観が浸透しはじめたことが示唆された。先行研究の批判的考察に基づき、研究課題を設定し、日本人の「コミュニケーション」観の実態を明らかにするため、大学院生1名を研究対象者とし個人別態度構造分析を実施した。その結果、研究対象者のもつ複雑な「コミュニケーション」観が示され、その解釈の際には、ペルクゼンが主張する「プラスチック・ワード」の概念を援用した。支配的な言説としての「コミュニケーション」観が強まる日本の現状を記述しながら、今後の研究の方向性についての議論を試みた。

キーワード：日本、コミュニケーション観、プラスチック・ワード

Abstract

This study aims to investigate perceptions of the word “communication” in Japan. Apropos this, the paper chronologically reviews the relevant literature to show how this word from the English language came to be used and understood in the country. The review suggests that from the late 1980s until the year 2000, the Japanese Ministry of Education and the Japanese economic industry gradually began to emphasize linguistic communication skills, as though it is the most prominent meaning of the word. This aspect of “communication” captured the attention of educational policy makers, economic professionals, and political members, who sought Japan’s advancement in a globalized society, as they realized that gaining better communicative abilities

* いわざき まいこ 文学研究科英文学専攻博士前期課程

指導教員：宮原 哲

** いたう あきひろ 外国語学部教授

meant better chances of success in the global context. In a globalized and connected society, good linguistic communication skills are imperative to better opportunities for both, individuals and countries. Given the background, this study explores how a Japanese person grasps the meaning(s) of “communication,” and what comprises its understanding today. Japanese, female, graduate students, majoring in communication studies, participated in this study. Personal attitude construct (PAC) analysis was used as a method of investigation. The results indicate complex perceptions of “communication” in the participant’s minds. While the most important understanding of “communication” is close to its etymological meaning, which is “to share information in order to develop relationships,” the data illustrate participant’s awareness of the fact that “communication” is seen as “surface level linguistic skills” that can be tested, proven, and developed in Japanese society. For an in-depth understanding of the results, the authors used the concept of “plastic words,” as coined by Pöerksen. “Plastic words” refer to powerful, dominating discourses that are pervasive in society. The meaning(s) of plastic words become fixated and influential because they represent the idea of obtaining better opportunities in life and of success in the globalized world. The participant’s complex perceptions of “communication” suggest that the word exists as a “plastic word” in Japan. This may be because the discourses surrounding the word, particularly, “high linguistic communication skills,” imply more opportunities at work and in life in Japan.

Key words: *Japan, perception of communication, plastic word*

1. 問題の所在

本論文の目的は、日本人大学院生の「コミュニケーション」観に着目し、それがどのような要因によって形成された可能性があるかを探求することである。初めに「コミュニケーション」という言葉が日本にどのように伝わり、どんな意味を担ってきたのか、複数の観点から先行研究を踏まえて確認する。次に先行研究の批判的考察に基づき、個人の中で「コミュニケーション」という言葉がどのような意味でとらえられているかを調査するために、研究課題を設定する。そして研究課題を検討するため、個人別態度構造分析を実施する。最後に調査結果に考察を加え結論を導く。

2. 日本人と「コミュニケーション」

日本社会において「コミュニケーション」という言葉は、様々な場所や状況で利用され、その意味も微妙に異なるのではないだろうか。日常生活で用いられる「コミュニケーション」という言葉の意味は、学校や企業などの組織で用いられる「コミュニケーション」の意味と同じだろうか。そして、日本人が抱くであろう「コミュニケーション」という言葉の意味は、一体どのようなものだろうか。本節では、「コミュニケーション」という言葉が、日本社会において、どのように発達、普及し、現在に至るまで汎用性を高めてきたのかについて歴史的観点から検討する。

「コミュニケーション」という概念が明治時代から日本に存在したことは、福沢諭吉の言葉から読み取ることができる。福沢は、「コミュニケーション」を意味する言葉として「人民交通」という言葉を使い、通信機器などの手段を用い人々の思想を「伝達分布」することの重要性を説き、異なる身分の人々の「相互交流」を通して西洋の知識を日本に根付かせるべきとの主張を展開した（紀平，1987，p. 110）。さらに、福沢諭吉や尾崎行雄は明治維新後、「西洋レトリックを演説法、雄弁術として」普及させようとした（宮原，2011a，p. 16）。1900年以降、「コミュニケーション」という言葉は日本社会に浸透していくものの、現

代に至るまでカタカナ表記の外来語として使われることから、「コミュニケーション」に対する認識やコミュニケーション研究の定着についての見解は、研究者によって異なるようだ（久米，1993）。

本論文では、現在の日本における「コミュニケーション」という言葉の意味を（1）メディア・マスコミュニケーション、（2）通信手段・デバイス、（3）スキル、（4）国語力、（5）英語力、（6）本質、の6つに分類し、どのような意味として使われてきたのかを確認する。（1）（2）（3）は実用日本語表現辞典（2019）を参考に、（4）（5）（6）は教育を通して伝えられる「コミュニケーション」に着目し分類を行った。

2.1 メディア・マスコミュニケーションとしての「コミュニケーション」

「コミュニケーション」という言葉が一般的に知られるようになった背景のひとつには、マス・コミュニケーション（マス・メディア）の発達がある。日本では、1925年にラジオ放送が、そして、第二次世界大戦後の1953年にテレビ放送が始まった（大石，2017；佐伯，2014）。そして、地上波テレビ放送が発達したのは1950年代から1960年代にかけてである（佐伯，2014）。1990年代にインターネット時代に突入するまでの間、新聞と並び、ラジオ、テレビは情報伝達的手段として地位を確立していった（大石，2017；佐伯，2014）。これらの情報媒体は、日本でもマス・コミュニケーションとして知られるようになる。

ラジオやテレビが普及しはじめた1950年代、社会学者の清水幾太郎は著書『社会心理学』にて、「マス・コミュニケーション」（原文ママ）という言葉を使い、マスコミの特徴を記述し考察を行った（大石，2017；清水，1951）。1959年にはマス・コミュニケーション研究で著名な学者、ウェルバー・シュラムの著作『マス・コミュニケーションと社会的責任』の和訳版が出版される（シュラム，1959）。シュラムは1959年以前にも『現代社会のコミュニケーション』（1948）、『マス・コミュニケーション』（1949）、『マス・コミュニケーションの過程と効果』（1954）を日本で出版している（シュラム，1959）。1950年代の日本では、メディア・マスコミとしての「コミュニケーション」への注目が高まったと考えられる。

1969年には『マスコミ近代史』（中野渡，1969）が出版され、題名に略語が使われていることや、本文中に「現代『マスコミ』という言葉はおおぜいの人々になにげなく使用されている」（p.1）と記されていることから、日本においてメディア・マスコミとしての「コミュニケーション」が一般的になったと推測される。その傾向は1990年代にまで続き、『日本の大学におけるコミュニケーション教育の実態調査報告Ⅰ』（古田・久米・長谷川，1991）には、「日本では『コミュニケーション』というと、ほとんどの人が『マス・コミュニケーション』を中心としたメディア論を思い浮かべるのではないだろうか」と記されている。以上から、日本においてラジオ、テレビなどのメディアが普及、発達した1950年代から1990年代においては、「コミュニケーション＝マスコミ」という認識を持つ人が多かったと考えられる。

2.2 通信手段・デバイスとしての「コミュニケーション」

「コミュニケーション」は通信を意味することもある。通信手段となる電話やファクシミリ、パソコンなどの機器や技術の発達と「コミュニケーション」という言葉の普及との関係についても検討する必要がある。背景には、コミュニケーションを機械的に捉え、数学的観点から、ベル電話会社の発信過程と受信過程を参考に提唱された Shannon & Weaver (1949) のコミュニケーション・モデルの影響が示唆される（久米，1993，p.29）。

日本では、マス・コミュニケーション、マス・メディアの発達に先がけて、1890年から国営による加入電話サービスが整えられ、普及の道を歩み出した（佐伯，2014）。その後、1979年に「全国ダイヤル即時化」が実現された。これは電話を身近なものとする契機となり、1980年代から1990年代には家庭電話に加え、ファクシミリ、携帯電話、パソコンなどの通信機器が急激に発達し普及することになった（佐伯，2014；総務省，2009）¹。

1999年には社名に「コミュニケーション」を含む「NTTコミュニケーションズ」が設立されたことから推察すると、日本において「コミュニケーション」が通信を表す言葉として認知されるようになったのは、2000年前後と考えられる。

2.3 スキルとしての「コミュニケーション」

インターネットを含む通信手段や機器の発達が加速した2000年前後、経済界や企業は「コミュニケーション能力」を重視するようになった。新聞記事の言説分析を行った中西（2012）によると、2004年ごろには訓練して習得するスキルを示す「コミュニケーション能力」という言葉が使用されるようになった。背景には、同時期に日本経済団体連合会が公開した「新卒採用に関するアンケート調査結果」において「コミュニケーション能力」が第1位となったこととのつながりが示唆される（中西，2012）。

芳賀・宮原・田崎・申（2015）の報告によると、企業が考える「コミュニケーション能力」とは、「双方向性」、「発信力」、「アクティブリスニング」、「開示性」、「能動性」を含む「コミュニケーションの基盤」とされる。また公益財団法人日本生産性本部（2017）は、グローバル化や多様性が加速する社会において、「異質な個人や組織等との意見対立や葛藤」を越えるため「異質価値を前提としたコミュニケーション能力が重要な役割を果たす」と主張する（p.5）。ここでの「コミュニケーション能力」とは、「発信力」、「他人の意見を聞き、尊重する力」、「他者とのやり取りを通じた価値の創造」であり、そのような能力を育成するための体系的なプログラムの必要性を論じている（公益財団法人日本生産性本部，2017，pp.6-9）。現代の日本社会において「コミュニケーション能力」とは、こうしたプログラムを通して身につける技能やスキルとして認識されている可能性が高い。

このような企業による「コミュニケーション能力」の言説を具現化するのがメディアである。2002年からは単行本・ビジネスの年間ベストセラーにて、『論理力を鍛えるトレーニングブック』、『人を10分ひきつける話す力』、『たった1分でできると思わせる話し方』、『誰とでも15分以上会話がとぎれない！話し方66のルール』など、「コミュニケーション能力」に関連すると予測されるタイトルの本が名を連ねるようになった（トーハン調べ，2002，2005，2009）。企業が「コミュニケーション能力」を主要な価値として提示することで、書籍を含むメディアはその価値をテキストに起こし「言説実践」を行い、受け手はメディアを消費することで「コミュニケーション能力」の言説を実践してきたといえる（中西，2012，p.11）。

2.4 国語力としての「コミュニケーション」

2000年には、国語教育においても「コミュニケーション」が重視されるようになった。この年に第22期国語審議会が告示した『現代社会における敬意表現』では、「円滑なコミュニケーション」が強調されている（文化庁，2000；脇，2019）。文法や論理の適切な組み立て、平易な語彙の選択、相手・状況に合わせた言葉遣いを含む「敬意表現」に注意することで、「円滑なコミュニケーション」が実現すると示されている（文化庁，2000）。この点において、コミュニケーション行動を、言語的、もしくは表面的な行為として捉えていると考えられる。

2004年の『これからの時代に求められる国語力について』（文化庁，2004）では、「コミュニケーション能力」という言葉が使われ始めた。ここでの「コミュニケーション能力」は、「人間関係形成能力」や「効果的に発表・提示する能力」を意味し、その根幹は「国語の運用能力」とされる（文化庁，2004，p.3；脇，2019，p.4）。他にも同文書においては、日常的なコミュニケーション（関わり合い）の減少、言語教育力の低下、情緒の欠如を「コミュニケーション」に関わる問題として指摘し、国語教育を通して「コミュニケーション能力」を鍛えることで、それら社会問題の改善につなげることを示している（脇，2019）。2007年の『敬語の指針』（文化庁，2007）においては「コミュニケーション能力」という言葉は使用されていないが、人間関係構築において「言語コミュニケーション」が重要であるとし、「実践的な教育によって向

上するもの」と位置付けられている（脇，2019）。

それから11年の期間を経て、2018年度に文化審議会国語分科会から発行された『分かり合うための言語コミュニケーション』では、コミュニケーション学の学問的研究が反映されたのか、「コミュニケーションやコミュニケーションに関する力は、様々な要素を含んだ複雑なものであって、いろいろな問題をたちどころに解決に導く『魔法』のように働くわけではない」（文化庁，2018，p. 3）とされ、「そもそもコミュニケーションという用語については、人によって意味や用法、抱いているイメージが異なる」（p. 3）という内容も加わり、コミュニケーション力編重への注意喚起も言及されるようになった（脇，2019）。

2.5 英語力としてのコミュニケーション

日本の英語教育政策において「コミュニケーション」が強調されたのは、1989年に告示された中学校・高等学校の学習指導要領においてである（文部科学省，1989）。以降、現行の中学校・高等学校学習指導要領（文部科学省，2016，2019）に至るまで、「コミュニケーション」に重点を置いた目標が掲げられている。英語教育政策において約30年以上前から使用してきたことから、学校英語教育が日本人の「コミュニケーション」に対する認識に与えた影響は存在すると考えられる。2019年に告示された高等学校の『外国語学習指導要領』には、第1目標として以下の記載がある。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す（文部科学省，2019）

上記の「外国語によるコミュニケーション」とは、4技能を駆使した英語による言語運用能力を指し、同時に「的確な理解」「適切な表現や伝達力」という、社会的経験を通して習得する「コミュニケーション」における相応しい態度や言語の使い方（Hymes, 1972）が含まれる。また、「論理・表現Ⅰ」の項目には、「論理の構成や展開を工夫して話したり書いたりして伝える又は伝え合うことなどができるようになるための指導を行う」と記されている（文部科学省，2019）。ここに「コミュニケーション」という言葉は使われていないが、論理的思考力が強調される背景には、日本語が「間接的論理展開」を好む言語であるという考えが反映されている（久保田，2015，p. 9）。そして、「英語が直線的な論理展開をする」ことになり「英語の論理に沿った考え方を学ぶ必要があると主張」し、英語的な「コミュニケーション」の指導を促している（久保田，2015，p. 9）。

2016年に改訂されるまでの『外国語教育学習指導要領』には「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」が含まれていた（文部科学省，2008）。「積極的な態度」がどのようなものかは明記されていないが、自己主張や自己表現を示唆し、「西洋的バイアス」（Kim, 2002, p. 1）に影響された明示的なコミュニケーション・スタイルを暗示するとも考えられる。コミュニケーションを強調する英語教育政策の背景には、国際化、グローバル化に対応できる人材育成という目的がある（江利川，2018；久保田，2015）。2000年には、英語教育政策と経済産業界の双方が同時期に、「コミュニケーション」を強調し始めた。2000年1月から12月にかけて行われた政府主催の「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」には、経済産業界の代表者が参加し「将来、英語による基礎的・実践的なコミュニケーション能力をしっかりと身に付けることは、国際化、グローバル化が急速に進む今日、極めて重要な課題である」（文部科学省，2001）とした。その後も上記のような議論を基に学校英語教育は「コミュニケーション」重視を強化し、経済産業界はスキルとしての「コミュニケーション」能力を強調し続けている。

2.6 本質的な「コミュニケーション」

これまで各分野・領域における限定的な「コミュニケーション」について論じてきた。本節では、本質的な「コミュニケーション」とは何かを示すために語源を調査した。「コミュニケーション」の由来は *commu* という接頭辞を持つラテン語の「*communio*」（神との交わり）（久米, 1993, p. 26）、「*communis*」『共通』『共有』（岡部, 1993, p. 55）、もしくは「*communicatus*」『他人と共有する』（宮原, 2011a, p.15）とされる。人間だけではなく霊的・神的な交わりも含め、周囲とものごとくや概念の共有が語源である。語源が示唆する本質的な「コミュニケーション」とは、周囲との関係構築のための「共有」だと言える。

「コミュニケーション」に対する認識の変遷を示すため、日本におけるコミュニケーション学の発展について取り上げる。前述の通り、「コミュニケーション」という概念は明治時代、もしくはそれ以前から日本にも存在し、教育現場において伝えられてきた（井上, 2011）。当時は「コミュニケーション」というカタカナ言葉ではなく、「弁論術」、国語教育における「会話科」、「話し方の指導」などとして教授されてきた（井上, 2011, pp. 149-50）。大正から昭和後期（1970年代）のコミュニケーション教育も、弁論、ディベート、討論、言語技術教育、言語論理教育など、多様な名称のもとに行われてきた（井上, 2011）。1971年に設立された「太平洋コミュニケーション学会」が1985年に「日本コミュニケーション学会」へと名称を変更したところから、「日本独自の文化、歴史、社会事情などを取り入れて日常の表象行動を研究する」（宮原, 2011b）という具体的な目標に沿い、日本でのコミュニケーション学やコミュニケーション教育が盛んになりはじめた。

近年、コミュニケーション学において定義される「コミュニケーション」とは、『人間がシンボル（言語・非言語）で作ったメッセージを交換し合い、お互いを影響しあう過程』（宮原, 2019, p. 28）や、「コミュニケーションとは他者との関係性であり、その関係性のあり様によってさまざまな意味が生まれていくプロセス」（池田, 2019, p. 82）を意味する。学問としての発展を通して、「コミュニケーション」の語源である「共有」という意味はより体系的に理論化され、「他者との関係を築くプロセス」という人間関係構築にとって本質的な概念であることが強調されるようになった。しかし、このような本質的な「コミュニケーション」が、一般的にどの程度理解されているかは不明である。

2.7 まとめ：多様な「コミュニケーション」観とそれらの力関係

戦後から1990年代にかけて「コミュニケーション」という言葉は、マスコミ、そして通信を意味する言葉として、その意味を徐々に拡大したようだ。そして、2000年代になると、現在のような多義的かつ包括的な意味を示す言葉として用いられるようになった。その背景には社会のグローバル化や情報化という社会的変化が影響をもたらしたと考えられる。

現代社会において「コミュニケーション」という言葉に対する認識を検討するため、筆者たちは、日本の私立大学で学ぶ大学院生2名（20代前半、男女1名ずつ）に対してインタビューを行った。そのインタビューでは、「コミュニケーション」という言葉を聞いて自由に連想するキーワードを挙げてもらった。その結果、「コミュニケーション英語」、「外国語での会話」、「コミュカ」、「会話・対話」、「会話を続けられること」、「初対面でもシャイにならずに話せること」、「自分の意志や考えを分かりやすく伝えられること」、「リーダーシップ」（想起順）が挙げられた。それらのキーワードを前述した「コミュニケーション」の6つの分類に当てはめると、教育界が求めている外国語（英語）能力と経済産業界が重視するスキルとしての「コミュニケーション」が研究対象者の意識に浸透しているように思われた。「会話・対話」、「会話を続けられること」、「初対面でもシャイにならずに話せること」、「自分の意志や考えを分かりやすく伝えられること」というキーワードは、国語力として強調された「人間関係形成能力」や「効果的に発表・提示する能力」と共通している。しかし、国語分科会が2018年以降「コミュニケーション能力」偏重に対する注

意喚起を示すようになったことから、上記キーワードは国語力としてではなく、訓練して習得する技能やスキルとしての「コミュニケーション」として認識されている可能性が高い。マスコミや通信、本質的な「コミュニケーション」は言及されなかったこと、そして、キーワードの想起順を考慮に入れると、研究対象者の認識における「コミュニケーション」の6つの分類・領域の関係は、【英語力・スキル>国語力>マスコミ・通信・本質】と推測された。

しかし、インタビューによるキーワードの抽出では、個人がもつ「コミュニケーション」観を構成する要素を捉えられたとしても、それらの関係は不明である。近年、研究法として注目を浴びている個人別態度構造分析を用いれば、要因間の関係や構造を明らかにできる（小澤・丸山，2009）。個人別態度構造分析では、研究対象者は一般的に1名や2名とサンプル数は少なく、イメージ類似度距離から抽出するクラスター構造を振り返り研究対象者本人がイメージや解釈の報告を行うので、再現性や安定性は高い（小澤・丸山，2009）。「平均値」や「分散」というデータは抽出できないが、個人別態度構造分析は「個」に着目すると同時に、類似度距離行列によってクラスター分析を可能にする（内藤，1997，p.58）。

グローバル化・情報化が加速する現代社会ではマクロレベルの境界線が薄れ、同じ文化圏の出身であっても1人ひとりの経験や考え方は独特で特有である（Dillon，2019）。同じ日本人であっても、それぞれの育った環境、学歴、経験などにより「コミュニケーション」観も多様である。そのため、個人の視点から現象学的観点を基に実施される個人別態度構造分析は有用な研究法である。以上の問題意識を踏まえて、本研究では個人別態度構造分析を用いた調査を行い、日本人大学院生の「コミュニケーション」観が、どのような要因によって構成されているか検討してみたい。

3. 方法

3.1 個人別態度構造分析（PAC分析）

本研究では、内藤（1993）が開発した個人別態度構造を用いた。個人別態度構造は、(1) 当該テーマに対する自由連想、(2) 連想項目間の類似度評定、(3) 類似度距離行列によるクラスター分析、(4) 被験者自身によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、(5) 実験者による総合的解釈の5段階によって構成される（伊藤，2010）。「実験者と被験者が同行しながら被験者の内界を探索、(中略) 客観的なクラスター構造というデータを媒介にして被験者の現象世界を了解するので『現象学的データ解釈技法』と呼ぶ（内藤，1997，p.59）。内藤（1993）は個人別態度構造分析の様々な適応範囲を示す中で、「言語イメージの形成過程や変容過程を実験的に分析する際に利用できる」（p.62）と記していることから、多種多様な「コミュニケーション」が、個人内でどのように認識されるかを検証する本研究において適切な手法であるといえよう。

3.2 目的

本研究の目的は、日本人大学院生の「コミュニケーション」観に着目し、それがどのような要因によって形成された可能性があるかを探求することである。

3.3 研究対象者

福岡県内にある私立大学の大学院博士前期課程に在籍する女子学生1名。学部において学士（英語学）を取得し、大学院ではコミュニケーション学を専攻している。

3.4 手順

調査の開始とともに、自由連想への刺激として次の文章を口頭で読み上げた。「あなたはコミュニケー

ションという言葉聞いてどのようなことを思い浮かべますか。思い浮かんだ言葉を順にカードに記入してください。」続いて、縦7cm、横5cmの大きさのカード20枚を研究対象者に渡し、自由連想してもらい、カードに記入してもらった。次に、項目間の類似度距離行列を作成するため、カードの全ての対をランダムに選び、以下の教示と5段階の評定尺度に基づいて類似度を評定してもらった。教示は、評定尺度が印刷された用紙を研究対象者に渡し、以下の文章を口頭で読み上げることでなされた。「あなたがコミュニケーションという言葉に関連するものとして挙げたイメージや言葉の組み合わせが、直感的イメージの上でどの程度似ているかを判断し、その近さの程度を次の尺度の該当する番号で答えてください。」

3.5 クラスタ分析

上記評定尺度のうち、同じ項目の組み合わせは0とし「とても遠い」は1、「遠い」は2、「どちらともいえない」は3、「近い」は4、「とても近い」は5というように0から5までの得点を与えることで類似度距離行列を作成した。この行列に基づいて、ウォード法によるクラスタ分析を行った。統計分析には、High Quality Analysis Libraries for Business and Academic Users-7（以下、HALBAU-7）（高木，2007）を利用した。

4. 結果

クラスタ分析（ウォード法）の結果から析出されたデンドログラムをコピーして一部は研究対象者に呈示し、もう一部は実験者（第一筆者）が見ながら、項目全体に共通するイメージやそれぞれの項目が併合された理由として考えられるもの、群全体が意味する内容の解釈について質問した。次に、第1群と第2群というように、クラスタ間を比較させてイメージや解釈について報告してもらった。最後に、全体についてのイメージについて質問し、複数の項目が併合された理由について補足的な質問をした。そして、各連想項目単独でのイメージを「プラス（+）」、「マイナス（-）」、「どちらでもない（0）」のどれに該当するか回答してもらった。図1は実験者によるクラスタ分割の原案であり、図2は連想項目と単独イメージをまとめたものである。

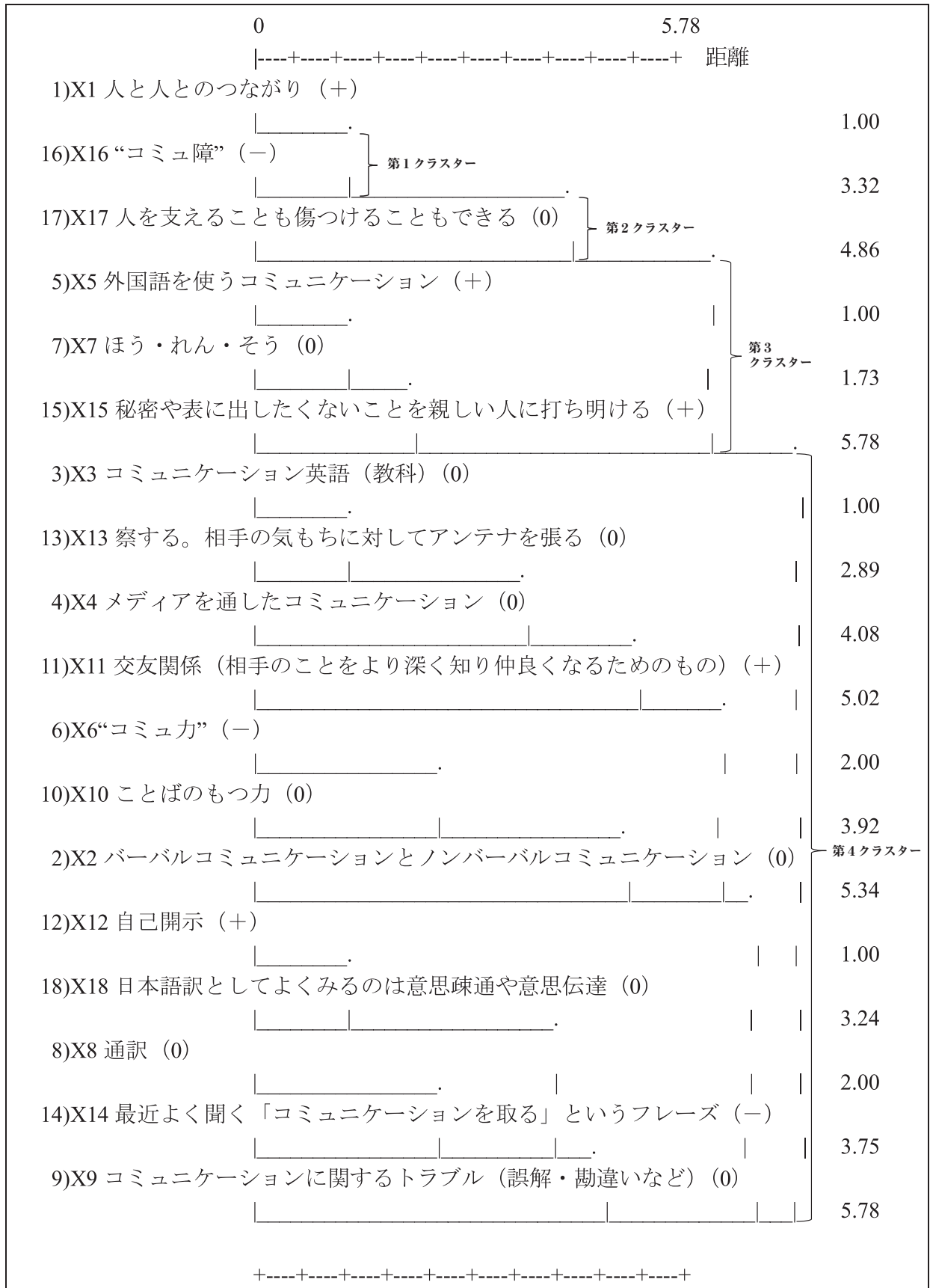


図1. 実験者によるクラスター分割の原案・クラスターに含まれる連想項目と単独イメージ (左の数値は想起順位)

5. 研究対象者によるクラスターの解釈

以下の〈質問：〉は、実験者による質問部分を示している。研究対象者の回答部分は斜字体で示されている。

5.1 研究対象者によるクラスターのイメージと解釈

〈質問：最初に、第1クラスター「人と人とのつながり」の1項目を見てどのようなイメージを思い浮かべますか。〉

(…)²人と仲良くなるのも悪くなるのもコミュニケーションが関係しています。コミュニケーションの一番の目的は誰かとつながること。

〈質問：次に、第2クラスター「“コミュ障”」の1項目を見てどのようなイメージを思い浮かべますか。〉

(…)³うまく喋れない人、あまり友達がつくれぬ人、自虐的に自分で「コミュ障だから」という使われ方もしている。好きな言葉ではないし、使いたくないし、学校などでも学生に簡単に使ってほしくない言葉。

〈質問：次に、第3クラスター「人を支えることも傷つけることもできる」、「外国語を使うコミュニケーション」、「ほう・れん・そう」の3項目を見てどのようなイメージを思い浮かべますか。〉

(…)⁴「ほう・れん・そう」以前に、相手との関係があるはずで、その関係を構築するべきだけど、「ほう・れん・そう」ばかりが重視されている。(…)⁵今のバイト先でも「ほう・れん・そう」は大事だけど、それ以上に気遣いや当たり前の日常会話がある。(…)⁶「外国語コミュニケーション」は、「人を支えることも傷つけることもできる」に近い気がする。(…)⁷英語でのコミュニケーションに関しては、留学中の経験で友達のちょっとした一言で支えられたことがあり、逆に同じ留学先で道端を通る人の一言で傷ついたこともある。日本語でも英語でも支えることも傷つけることもできる。

〈質問：第4クラスター「秘密や表に出したくないことを親しい人に打ち明ける」、「コミュニケーション英語」、「察する。相手の気もちに対してアンテナを張る」、「メディアを通したコミュニケーション」、「交友関係（相手のことをより深く知り仲良くなるためのもの）」、「“コミュカ”」、「ことばのもつ力」、「バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーション」、「自己開示」、「日本語訳としてよくみるのは意思疎通や意思伝達」、「通訳」、「最近よく聞く『コミュニケーションを取る』というフレーズ」、「コミュニケーションに関するトラブル（誤解・勘違いなど）」の13項目を見てどのようなイメージを思い浮かべますか。〉

「秘密や表に出したくないことを親しい人に打ち明ける」ということに関する経験は、自分の中で大きく根付いている気がします。今、高校などで行われている「コミュニケーション英語」はすごく表面的。実際に、秘密や表に出したくないことを親しい人にどう打ち明けるか、もしくは反対に、秘密にしたいことをどうしたら話さずに済むか、などは無視されている気がする。

「メディアを通したコミュニケーション」と「秘密や表に出したくないことを親しい人に打ち明ける」も実は繋がっている。面と向かって言うのは難しいことも、メディア、ソーシャルメディアを通して言う事ができる。メディアをあまり上手に使えない人は、相手の気もちを察するのが難しいのかも。(…)

<質問：第4クラスターの中でも「交友関係（相手のことをより深く知り仲良くなるためのもの）」、「“コミュカ”」、「ことばのもつ力」は小さなグループを形成しているようですが、このグループからどのようなイメージを思い浮かべますか。>

「交友関係」を深めるには、ノンバーバルだけではなく、「ことばのもつ力」が大きい。（…）「“コミュカ”」は、「“コミュ障”」の逆のイメージとして浮かんだ。「コミュカ」は交友関係にも関連している。「コミュカ低い」とラベルを貼ることで、それがひとつのパワーとなって、「コミュニケーション下手だから友達あまりいない」というように交友関係にもつながっている。

<質問：第4クラスターの中でも「バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーション」、「自己開示」、「日本語訳としてよくみるのは意思疎通や意思伝達」、「通訳」、「最近よく聞く『コミュニケーションを取る』というフレーズ」、「コミュニケーションに関するトラブル（誤解・勘違いなど）」はもう一つ小さなグループを形成しているようですが、このグループからどのようなイメージを思い浮かべますか。>

大学のコミュニケーション学で知った言葉が多い気がします。「バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーション」、「自己開示」、「コミュニケーションを取る」は、授業で取り上げられていた。「コミュニケーションに関するトラブル」も、コミュニケーションという概念を学んだからこそ気づいたこと。「通訳」に関しては、野球選手・大谷翔平の通訳である水原さんを見ていてすごいと思った。ただ単に英語が話せるだけではなく、野球の知識も必要。（…）アメリカと日本との違いや共通点、（アメリカと日本における）自己開示の違いについてなども含め、能力が高い人だと思う。

5.2 クラスター間の比較

<質問：次に、クラスター同士を比較して共通点や相違点など感じることを教えてください。まずは、第1クラスターと第2クラスターを比較してどのように感じますか。>

やっぱり「“コミュ障”」（第2クラスター）という言葉はすごくイヤな響きだな、と思います。「人と人のつながり」（第1クラスター）を妨げてしまう。でもコミュニケーションの一番の目的といえば、人とのつながり、関係を構築するため、と考えた場合、「コミュ障」という言葉が出てくるのもある意味仕方がないのかもしれない。コミュニケーションがダイナミックなプロセスだからこそ、生まれるもの。（…）理解して受け止めていくことが、（人と）つながることに関係してくる。

<質問：第1クラスターと第3クラスターを比較してどのように感じますか。>

（…）「外国語を使うコミュニケーション」も「人と人のつながり」と関係する。私のなかで一番つながりを実感したのは英語で話しているときかもしれない。もちろん日本語でも人とつながるのも分かるけど、それ以上に英語を話していると、人と支えあう、ということを感じる。例えば旅行先などで、イギリス人ではなく英語を母語としない人とでも、お互い理解できる言語だから英語で話すが、支え合ったり、受け入れたり、一生懸命互いを理解しようとしたり。（…）日本では、同じ大学に通う人でも、趣味とかパーソナルな内容の話でも薄っぺらいと感じてしまうこともある。（…）

<質問：第1クラスターと第4クラスターを比較して感じることはありますか。>

全部に共通しているのがやっぱり「人とつながる」ということ。「交友関係」も「何かを打ち明けること」も人とつながることに関係している。「バーバル・ノンバーバル」、「自己開示」、「通訳」なども人とつながることに関係している。

<質問：第2クラスターと第3クラスターを比較して感じることはありますか。>

“コミュ障”という言葉って、やはり傷つける言葉。すごく薄っぺらい、言葉の流行に近い。そういう意味では「ほう・れん・そう」も同じようなにおいがする。コミュ障やコミュニケーション障害って、外国語でもあるのか分からないけど、“retarded”のように差別的な言葉もあるのかもしれない。そういう言葉も「ほう・れん・そう」なども、コミュニケーションという大きな言葉から生まれる「産物」でもあるし、そういう（差別的な）言葉を使うから形成されていく見方や視点でもある。

<質問：第2クラスターと第4クラスターを比較して感じることはありますか。>

(…) “コミュ障”と“コミュカ”は関連している気がする。(…) (第4クラスターの)「秘密を打ち明ける」ということも含めて考えると、「コミュ障」の人は「秘密を打ち明けるのが苦手」「自己開示が下手」「相手の事を察せない」「交友関係もせまい」というようなことが言われていると思うが、それだけではない。シャイだから、あまり自分のことをペラペラ打ち明けたくないから、という人もいたり、察するという（日本的な）ことも違う文化圏に行ったら好まれない場合もあったり、人それぞれ苦手なこと得意なことあるから、ペラペラ話せない、自己開示が苦手、あまりうまく自己開示ができないことを一緒に“コミュ障”とラベルを貼ってしまうのは違うのかな。

<質問：第3クラスターと第4クラスターを比較して感じることはありますか。>

英語を使ったときにより強く感じたことがまとまっている気がする。傷つけることも支えることもある、言いたくないことを打ち明けることで初めて自分の事に気づいて、相手の事も知ることができたりした。(…)

<質問：最後に、全体について感じることはありますか。>

全部見た時に、最初に書いた「人と人とのつながり」が自分の中でやっぱり大きいのかな、と。(…)「“コミュ障”」「“コミュカ”」「コミュニケーションを取る」というような言葉もあり問題もあるけど、それを一旦受け止めて飲み込んでいく姿勢も必要。それも人とつながるために必要なこと。(…)

6. 考察

研究対象者は、自身の経験をもとに様々な観点から「コミュニケーション」に対する認識を述べた。アルバイトの経験、友人との関係、学部生時代にコミュニケーション学に関係する科目の履修を通して、「コミュニケーション」を人間関係構築として第一に捉えていることが判明した。しかし、研究対象者の意識の中で人間関係構築という本質的な「コミュニケーション」と同時に、スキルや技能、表面的な英語力として表出する支配的な「コミュニケーション」も混在することへの葛藤が感じられる。“ほう・れん・そう”³のように「形」だけの「コミュニケーション」が日本社会において重視されることや、“コミュ障”“コ

ミュカ”のように“薄っぺらい”「コミュニケーション」が日本社会に存在する事への懸念であると解釈できる。

また、研究対象者は英語（外国語）による「コミュニケーション」も“人と人とのつながり”に深く関係する「コミュニケーション」であると述べた。英語（＝母語ではない言語）での「コミュニケーション」を通して“支え合い”を感じた研究対象者自身の経験から、英語力と“人と人とのつながり”という本質的な「コミュニケーション」との関連性を説明した。しかし、学校英語教育による表面的な「コミュニケーション」が強調されることに対する懸念も示した。学校英語教育では、表に出したくないことを開示する「コミュニケーション」や、それに対する気遣いや察しを伝えるものではなく、その場しのぎになりかねない“バーバルコミュニケーション”が重視されていることへの懸念である。野球選手の大谷翔平の通訳をつとめる水原一平氏を例に挙げ、英語がペラペラ話せるだけではなく、野球の知識はもちろんのこと、社会的、文化的な背景・要素を理解することの重要性を述べた。

クラスター間の比較では、クラスター内・クラスター間において本質的な「コミュニケーション」と表面的な「コミュニケーション」が交互に並んでいることが明らかとなった。第1クラスターの“人と人とのつながり”（本質）、第2クラスターの“コミュ障”（表面的）、第3クラスター内では“人を支えることも傷つけることもできる”（本質）、“外国語コミュニケーション”（本質的でもあり表面的でもある）、“ほう・れん・そう”（表面的）というように、交互に配置されている。全体を振り返ると、研究対象者にとって「コミュニケーション」とは、本質的な“人と人とのつながり”という認識に基づいてはいるが、社会においてスキルや表面的な英語力のように訓練によって習得する「コミュニケーション」という捉え方が存在することへの認識もあり、複雑であることが示唆される。

本論文第2章においてコミュニケーションを6つに分類し、日本人大学院生の「コミュニケーション」に対する認識において、【英語力・スキル>国語力>マスコミ・通信・本質】という関係が存在することを予測したが、この個人別態度構造分析の結果は、様々な「コミュニケーション」の入り組んだ複雑な関係を示していると解釈できる。“人と人とのつながり”という本質的な「コミュニケーション」という捉え方が土台にあるものの⁴、表面的なスキルや英語力としての「コミュニケーション」が重視される社会において、後者2つへの認識が支配的に覆いかぶさるイメージと解釈できる（図2参照）。国語力として強調されてきた敬語や敬意表現としての「コミュニケーション」への認識は示されず、マスコミ・通信としての「コミュニケーション」については、主にソーシャルメディアを介した「コミュニケーション」に関する研究対象者の考えが述べられた。親密な相手だからこそソーシャルメディアにおいてもつながることが言及されたことから、この項目においても“人と人とのつながり”という認識が土台にあると解釈できる⁵。

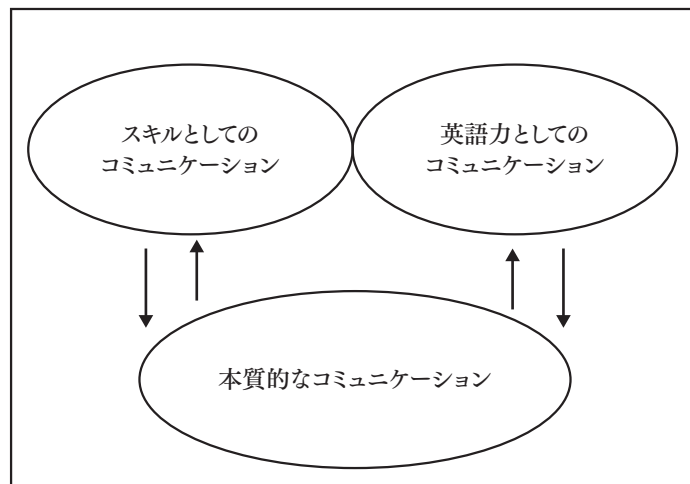


図2. 研究対象者の「コミュニケーション」に対する意識構造（実験者の解釈）⁶

図2の内容を踏まえ、本研究の個人別態度構造分析の結果を説明するにあたり、ペルクゼン（2007）のプラスチック・ワードという概念を利用する。プラスチック・ワードとは、社会的に力を持ったステレオタイプとして使われる言説のことである。プラスチック・ワードに分類される言葉は、明示的意味よりも含意が支配的、普遍的であるといわれている。プラスチック・ワードは、経済的な利益や社会的地位の上昇に関係し「ことばの内容ではなく、その機能が優越する」⁷（ペルクゼン，2007，pp. 210-211）とされる。ペルクゼンは「コミュニケーション」をプラスチック・ワードのひとつの例として挙げている。プラスチック・ワードとしての「コミュニケーション」という概念は、本研究にて行った個人別態度構造分析の結果から、日本においても当てはまるのではないだろうか。研究対象者が、本質的な「コミュニケーション」（明示的意味）と表面的なスキルや英語力としての「コミュニケーション」（暗示的意味）⁸が混在すること、さらには暗示的意味が支配的であることに対する認識を示したためである。

プラスチック・ワードは、それ自体に非があるわけではない。問題はその「特殊な使い方」であり、状況に応じて意味を順応させ適切に使われる場合もある（ペルクゼン，2007）。「特殊な使い方」を後押しするのは、科学、経済、行政に関係するエキスパートである。彼らは、経済的成長、グローバル社会での繁栄などを具現化するための道具として利用する（ペルクゼン，2007，p. 212）。利益の実現を目的としてプラスチック・ワードを自由に組み合わせ、派生させ、複合語を形成する。「コミュニケーション能力」という言葉は、その例である。研究対象者のように本来の意味を理解・認識していても、日本社会において「コミュニケーション」＝「訓練し習得する技能、進学や就職の際に示すための計測可能な能力や表面的な英語力」として言説実践が行われる場においては、「ことばの内容ではなく、その機能が優越」（ペルクゼン，2007，p. 210）した状態なのだ。

ペルクゼン（2007）に「日本語版に寄せて」という章を寄稿したエーファ・オトマーは、プラスチック・ワードの本性を、「わかりやすいように翻訳できないこと、つまりはまったく具体的でないこと」（p. 215）だとしている。日本において「コミュニケーション」という言葉は現在に至るまでカタカナで表記され、明確な日本語訳がない。英和辞書にて communication の定義を調べると、「伝える [伝わる] こと、伝達、連絡、報道、通信、更新、意思疎通、交際、情報、通信工学」と多様な訳（意味）が記載されているが（小西・南出，2001，p. 457）、日本人にとって未だ実体らしいものはなく、具体性に欠ける言葉なのだ。そのため政治や企業において権力をもつエキスパートや、エキスパート側に立つ人々は、彼らにとって都合の良い「訓練すれば習得できる技能のようなコミュニケーション」という意味概念を「コミュニケーション」に付与していったのかもしれない。中西（2012）が提示するように、このような支配言説から脱却するには、言説実践が成立する条件を調査して対応策を検討する必要がある。今回の調査を基礎的研究とし、今後、世代、性別、ジェンダー、学術的な背景が異なる複数の研究対象者に対し調査を行い、日本人が持つ「コミュニケーション」観の分析を続け、「コミュニケーション」の言説実践が行われる条件・要素を明らかにしたい。

7. まとめと今後の課題

本論文では大学院生1名を研究対象者として、「コミュニケーション」観に関する個人別態度構造分析を行った。その結果、分析では4つのクラスター構造が提示され、本質的な「コミュニケーション」への認識が強いものの、表面的なスキルや英語力としての「コミュニケーション」が日本社会に存在することへの葛藤や懸念が明らかとなった。「コミュニケーション」を本質的な概念として捉えている背景には、研究対象者の個人的経験、友人関係、留学、大学での学びが影響していることが示された。研究対象者は、本質的な「コミュニケーション」への認識がありながらも、同時に、日本社会において表面的なスキルや英語力としての「コミュニケーション」が強調される現実も認識している。この点を考慮に入れると、「コ

コミュニケーション」が支配的な力を持ち言説空間を創造するプラスチック・ワードとして機能している可能性が示唆される。今後は背景の異なる研究対象者に協力を依頼し、日本人が持つ「コミュニケーション」観の分析を続け、「コミュニケーション」の言説実践が行われる条件・要素を明らかにしたい。

注

1. 1980年代、1990年代発売された通信機器（携帯電話やパソコン）広告分析において、コミュニケーションという言葉はほとんど使用されていないことが判明した。そのため、このカタカナ言葉が通信機器や技術の発達と同時に普及したか否かについて検証することは難しい。
2. インタビュー内容および結果の解釈の詳細は著者へ連絡されたい。
3. “” は、被験者が自由連想の際に書きだした言葉、もしくは被験者の発言を示している。
4. “人と人のつながり”という本項目は、研究結果の第1クラスターであり、研究対象者が全体を振り返った際にも最も重要性が高いことを述べた。
5. pp.14-15<第4クラスター>に関するインタビュー内容を参照。
6. 「スキルとしてのコミュニケーション」、「英語力としてのコミュニケーション」、「本質的なコミュニケーション」の3つの位置関係や相互の影響力に関する考察は、今後の課題としたい。
7. 本文中の日本語訳は、ベルクゼン（2007）の訳者である糟谷に従う。
8. Communication という英語の語源が示すように、本来「コミュニケーション」とは周囲との関係構築のための「共有」が明示の意味であると考え、表面的なスキルや英語力としての「コミュニケーション」は暗示の意味として捉える。

参考文献

- 池田理知子. (2019). 「コミュニケーションの〈想像/創造する力〉記憶の継承」池田理知子・塙幸枝（編）『グローバル社会における異文化コミュニケーション—身近な「異」から考える—』（pp. 74-84）. 東京：三修社.
- 伊藤彰浩. (2010). 「理想の英語教師像の個人別態度構造分析」『西南学院大学英语英文学論集』50, 281-297.
- 井上奈良彦. (2011). 『現代日本のコミュニケーション研究—日本コミュニケーション学の足跡と展望』東京：三修社.
- 江利川春雄. (2018). 『日本の外国語教育政策史』東京：ひつじ書房.
- 岡部朗一. (1993). 「コミュニケーションの定義と概念」橋本満弘・石井敏（編）『コミュニケーション論入門』（pp. 54-74）. 東京：桐原書店.
- 大石裕. (2017). 「戦後日本の大衆社会論とマス・コミュニケーション論・再考」『法学研究』90, 1-26.
- 小澤伊久美・丸山千歌. (2009). 「PAC 分析における好ましい統計処理とは」『ICU 日本語教育研究』6, 25-47.
- オトマー, エーファ. (2007). 「日本語版によせて」ベルクゼン, ウヴェ. (2007). 糟谷啓介. (訳), 『プラスチック・ワード 歴史を喪失したことばの蔓延』（pp. 214-217）. 東京：藤原書店.
- 紀平健一. (1987). 「福沢諭吉の英語教育論—課題意識を中心に—」『日本英語教育史研究』2, 91-114 https://doi.org/10.11222/hisetjournal1986.2.0_91
- 久保田竜子. (2015). 『グローバル化社会と言語教育—クリティカルな視点から—』東京：くろしお出版.
- 久米昭元. (1993). 「コミュニケーション研究の主な領域」橋本満弘・石井敏（編）『コミュニケーション論入門』（pp. 25-53）. 東京：桐原書店.
- 公益財団法人日本生産性本部. (2017). 「グローバル化の中でのコミュニケーション能力～産業界の視点から考えるこれからの日本・日本人のあり方」<https://www.jpc-net.jp/research/assets/pdf/R28attached.pdf>
- 小西友七・南出康世. (2001). 『ジーニアス英和大辞典』東京：大修館書店.
- 実用日本語表現辞典. (2019). 「コミュニケーション」<http://www.practical-japanese.com/2019/02/communication.html>
- 佐伯千種. (2014). 「情報社会から高度情報ネットワーク社会への情報通信政策の変遷—情報化のデータの視点から—」『慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要』64, 123-135.
- 清水幾太郎. (1951). 『社会心理学』東京：岩波書店.
- シュラム, ウェルバー. (1959). 崎山正毅（訳）『マス・コミュニケーションと社会的責任』東京：日本放送出版協会.
- 総務省. (2009). 「第1章 ICT とデジタル経済はどのように進化してきたのか」<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r01/pdf/n1100000.pdf>
- 高木廣文. (2017). 『HALBAU-7 によるデータ解析』東京：シミック株式会社.
- トーハン調べ. (2002). 「2002年 年間ベストセラー」https://www.tohan.jp/pdf/2002_best.pdf
- トーハン調べ. (2005). 「2005年 年間ベストセラー」https://www.tohan.jp/pdf/2005_best.pdf

- トーハン調べ. (2009). 「2009年 年間ベストセラー」 https://www.tohan.jp/pdf/2009_best.pdf
- 内藤哲雄. (1993). 「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集』27, 43-69.
- 内藤哲雄. (1997). 「PAC 分析の適用範囲と実施法」『人文科学論集・人間情報学偏』31, 51-87.
- 中西満貴典. (2012). 「言説としての「コミュニケーション能力」の諸言表：支配的言説の脱構築のための予備的研究」『岐阜市立女子短期大学研究紀要』62, 9-15.
- 中野渡信行. (編). (1969). 『マスコミ近代史』東京：雄山閣出版.
- 芳賀日登美・宮原哲・田崎勝也・申知元. (2015). 「日本において企業が考えるコミュニケーション能力とは—半構造化面接法による探索的研究—」『Aoyama Journal of International Studies』2, 81-101.
- 古田暁・久米昭元・長谷川典子. (1991). 「日本の大学におけるコミュニケーション教育の実態調査報告 I」『異文化コミュニケーション研究』3, 91-115.
- 文化庁. (2000). 「第22期国語審議会 現代社会における敬意表現：国語審議会答申」 https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kakuki/22/tosin02/index.html
- 文化庁. (2004). 「これからの時代に求められる国語力について：文化審議会答申」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/015.pdf
- 文化庁. (2007). 「敬語の指針：文化審議会答申」 https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/keigo_tosin.pdf
- 文化庁. (2018). 「分かり合うための言語コミュニケーション（報告）」 https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodo-happyo/_icsFiles/afiedfile/2018/04/09/a1401904_01.pdf
- ペルクゼン, ウヴェ. (2007). 糟谷啓介. (訳). 『プラスチック・ワード 歴史を喪失したことばの蔓延』東京：藤原書店.
- 宮原哲. (2011a). 「コミュニケーション研究と教育—現状と課題—」『日本語学』30 (1), 14-24.
- 宮原哲. (2011b). 「まえがき」『現代日本のコミュニケーション研究—日本コミュニケーション学の足跡と展望』東京：三修社.
- 宮原哲. (2019). 『新版 入門コミュニケーション論』東京：松柏社.
- 文部科学省. (1989). 「高等学校外国語学習指導要領 第8節外国語」 https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h01h/chap_2-8.htm
- 文部科学省. (1989). 「中学校学習指導要領 第9節外国語」 https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h01j/chap_2-9.htm
- 文部科学省. (2001). 「英語指導方法等改善の推進に関する懇談会」 https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/010110b.htm
- 文部科学省. (2008). 「高等学校学習指導要領 第8節外国語」 https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h20h/chap_2-8.htm
- 文部科学省. (2016). 「中学校学習指導要領 第9節外国語」 https://erid.nier.go.jp/files/COFS/h29j/chap_2-9.htm
- 文部科学省. (2019). 「高等学校学習指導要領 学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語偏」 https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf
- 脇忠幸. (2019). 「文部科学省・文化庁報告書における「コミュニケーション（能力）」観についての覚え書き」『福山大学人間文化学部紀要』19, 1-13.
- Dillon, M. (2019). *Introduction to sociological theory theorists, concepts, and their applicability to the twenty-first century* (2nd ed.). West Sussex: Blackwell Publishing Ltd.
- Kim, Min-Sun. (2002). *Non-western perspective on human communication: Implications for theory and practice*. Thousand Oaks: SAGE Publications.
- Hymes, D. (1972). On communicative competence. In J. B. Pride & J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics* (pp.269-293). Harmondsworth: Penguin.
- Shannon, C. E. & Weaver, W. (1949). *The mathematical theory of communication*. Urbana, IL: University of Illinois Press.